瓊林49~100号　短歌　作者数と40首

本表では「瓊林」49～100号が収載する歌壇の作者数と40首の一覧を掲示した。
短歌は延べ96名から40首を選んだが、作者･作品数が少なく重複を避けられなかった。

号数	刊行年月	作者数	瓊林歌壇作品	
N049	1976(S51)/12			
N050	1977(S52)/5			
N051	1977(S52)/12			
N052	1978(S53)/5	1	真珠湾遠 く見下ろす岡の上わが影短く草生を歩む	黒岩二郎(37)
N053	1978(S53)/12	2	五十五年逢わざりし友を訪れぬ握手する手たがいにふるえて居たり	古賀琢一 (21)
N054	1979(S54)/5	3	函館の桟橋を上がれば異様なる臭気漂う鰊の港	於保薫平(22)
N055	1979(S54)/12	2	片淵に共に歌いし青春賦三年の春は夢のまた夢	鮫島正勝(31)
N056	1980(S55)/5	1	思案橋思案もせずてゆきゆけばカステラ匂う福砂屋の前	鮫島正勝(31)
N057	1980(S55)/12			
N058	1981(S56)/5			
N059	1981(S56)/12			
N060	1982(S57)/5	2	十二月八日は何の日かときかれ若き婦人らみな沈黙す	岩松繁俊(40)
N061	1982(S57)/12	2	結界に降る雨足は光つつ深き杉生のみどりに沈む	安藤寛(6)
N062	1983(S58)/5	1	楠の実は踏みゆくに明るき音を立つ友の墓見ゆる岡のべにして	黒岩二郎(37)
N063	1983(S58)/12	2	白秋の描けるスケッチに目をすえてひとりほほえむ昼のひととき	高橋一人(25)
N064	1984(S59)/5	3	逝く秋の飛騨の国分寺ほろほろと鐘にいちょうの葉が散る夕べ	鮫島正勝(31)
N065	1984(S59)/12	2	耶蘇寺の庭は昼の日まばゆきに蜜柑の白き花散りやまず	黒岩二郎(37)
N066	1985(S60)/5	2	高齢化社会険しと人は言う我我が道をしかと歩まん	高橋一人(25)
N067	1985(S60)/12	4	夏来れば原爆のこと秋来ればお宮日のこと哀し古里	鶴谷栄一 (27)
N068	1986(S61)/5	3	秋うらら石山寺に杖つけば御堂奥より読経流れるる	高橋一人(25)
N069	1986(S61)/12	5	八十路のわれらいで湯の里に集うかな戦後を生きて友みな老いぬ	山内三郎(19)
N070	1987(S62)/5	7	税申告の記入終りてしばらくは窓の入り日にわが対ひおり	黒岩二郎(37)
N071	1987(S62)/12	7	此処に学びし吾が遠き日や校庭のヒマラヤ杉は巨樹となりにし	安藤寛(6)
N072	1988(S63)/5	5	長崎の焼跡の街ゆき行きて白き坂道を詠み給ひたり	黒岩二郎(37)
N073	1988(S63)/12	6	胸底に何やら熱きもの湧きて友の慰霊の尺八を聞く	和多島憲三(26)
N074	1989(HI)/5	4	平凡に生きることこそ幸せと傘寿になりてしみじみ思ふ	鶴谷栄一 (27)
N075	1989(H1)/12	3	原爆はなぞ長崎をえらびたるはやくとつ国と交りたるに	山内三郎(19)
N076	1990(H2)/5	1	若き日は妻と来たりし洛北に姉と手早く土産を探す	鶴谷栄一(27)
N077	1990(H2)/12	2	母性愛知らぬ間に過ぐ少年期哀しきものよ老いて今なほ	鶴谷栄一(27)
N078	「1991(H3)/5	1	老いてなほ愉快に過ごす術なきや横車押す力残せり	鶴谷栄一(28)
N079	1991(H3)/12	1	老いゆけばよちよち歩きも詮なしか街角に立つ友の姿よ	鶴谷栄一(29)
N080	1992(H4)/5	2	卒業五十年に集いし友は激動の復興成長やり遂げた顔	山田庄三郎(34)
N081	1992(H4)/12	2	似て非なる兄弟無口そのままに過ぎて幾年人生無情	鶴谷栄一 (27)
N082	1993(H5)/4	1	色恋とただひたすらにかけぬけし頃なつかしや老いまさる日々	鶴谷栄一 (27)
N083	1993(H5)/12	1	緑陰の静けさに居て遠会釈老いてなほお茶目でお洒落夏帽子	田中安代(**)
N084	1994(H6)/4	1	年老いて心を開く友亡くし九官鳥をわが友とせり	鶴谷栄一(2或
N085	1994(H6)/12	2	春蝉の鳴き始めたる神苑の背の山はるか普賢岳噴く	渡部隆通(42)
N086	1995(H7)/5	2	数多く震災の惨読まれつつ季はいつしか春に移らふ	渡部隆通(42)
N087	1995(H7)/12	2	故里は原爆の跡何もなし高校野球で勝つよりほかに	鶴谷栄一(27)
N088	1996(H8)/5	2	年老いて金なき友が時にきて強がり言うに相づちを打つ	鶴谷栄一 (28)
N089	1996(H8)/12	1	先になり後になりつつ人の世を過ぎゆく姿尊くありな	鶴谷栄一 (29)
N090	1997(H9)/5	2	「おじいちゃん」扉の音に声高く迎えに老いの生甲斐覚ゆ	鶴谷栄一 (29)
N091	1997(H9)/12	1	この町に故里遠く住みついて時に小さき旅に出にけり	鶴谷栄一 (27)
N092	1998(H10)/5			
N093	1998(H10)/12			
N094	1999(HII)/5			
N095	1999(H11)/12			
N096	2000(H12)/5			
N097	2000(H12)/12			
N098	2001(H13)/5	1	受験終え宿にて聞きし夕ぐれの出船の汽笛に胸のうるみぬ	中畠文雄(27)
N099	2001(H13)/12	2	同窓の八十路の集い遊覧は九十九島の船に託せり	土橋敏孝(34)
N0100	2002(H 14)/5	2	天翔ける友の魂直接に感じてかなし名護の海べは	黒岩二郎(37)
件数(人員)　合計		96	*上表は延96人の作品(推定300首)から、私が任意に選抜した40首である。	